

人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究 Ⅲ

—Rosenzweig P-F Studyとその人格理論を中心として—
 高校生の因子分析*

一 谷 彊・植村 美 民

Factorial, experimental and clinical study of personality especially in
 terms of the Rosenzweig P-F Study and his personality theory
 — The factorial structure of senior high school students —

by

Tsuyoshi ICHITANI and Mitami UEMURA

Received August 17, 1965

目 次	
I. 目 的	ii. 男子の II_1 因子と女子の I_2 因子とにつ いて
II. 方 法	iii. 男子の III_1 因子と女子の III_1 因子とに ついて
III. 結 果	iv. 発達及び性差に伴って新しく出現す る因子について
IV. 考 察	V. 結 論
1. 重心因子行列について	Summary
2. 転回因子行列(心理学的因子模様)につ いて	参考文献
i. 男子の I_2 因子と女子の II_1 因子とにつ いて	

I. 目 的

Rosenzweig P-F Study に因子分析を施して、一谷(1964)は、小学生及び中学生における因子構造を明らかにし、発達のどの群にも一貫してあらわれる因子を見出したが、かかる一貫性のある因子に加え、これに付随する評点因子が、各群で変動のあることを見出した。さらに、このことから、人格の類型を特に、自我の独立と非独立(ego-independency and ego-dependency)及び個体間的と個体內的(interpersonal and intrapersonal)の二つの原理に基づいて分類し、妄想型(paranoïd)、強迫型(obsessive-compulsive)、ヒステリー型(hysteroid)、心気症型(hypochondriacal)等の人格型を見出すことができた。これらの人格型が果たして実体性を有するものであるかを検証するために行なった実験で、一谷(1965 a, 1965 b)は積極的にその実体性及び因子の性質を明らかにすることができた。林(1961)の研究でも、非行少年について同様の検証を行なった結果、臨床的にもこれら因子の様相が明らかになり、一谷の研究が支持されることになった。

今回の研究では、高校生について、そのP-F反応を分析し、上述のことが支持されるかどうかを明らかにし、発達のにも、これまでの研究よりも年令的に上層の群を対象として、その因子構造を究明

* 本研究にあたり、住田教授並びに P-F Study の日本版創案者である京都少年鑑別所鑑別課長林勝造先生の御指導を頂いた。ここに深く謝意を表する。

し、かかる一貫性が見られるかどうか、若し一貫性がないとすれば、どのような点でそれが変動するかをみてみたい。さらに、性別に因子分析して、因子構造に性差があるかどうかをもみようとする。

II. 方 法

Rosenzweig 原著、住田・林共訳の P-F Study 成人用日本版を京都市立紫野高校 2 年生男子 302 名、女子 177 名、合計 479 名の生徒に実施した。この学校を選択した理由は、先に一谷 (1964) の行なった研究では、京都市立鳳徳及び待鳳小学校の児童並びに、これら児童の進学する同一地域の京都市立旭ヶ丘中学校生徒を被験者としたので、今回もさらに、これらと同一地域にあり、且つこれらの児童・生徒の進学する高校として上記高校を選び、地域差の介入することを避けたからである。

反応語の評点に当っては、Rosenzweig のいう語義的解釈にできるだけ忠実に準拠し、住田・林・一谷 (1964b) による改訂版 P-F スタディ使用手引に従った。また、評点者による偏りを極力排除するために、一谷及び植村が個別に評点し、合致しない場合は協議の上、使用手引にできるかぎり準拠するように努めた。また反応語の評点に際して、場面の誤認による誤り反応の多い資料や、教示に忠実に従っていない資料は、すべてこれを棄却した。

評点した反応語は、被験者ごとに、各反応項目ごとに百分率に改めた。本来設定されている 24 場面の欲求不満場面に対してすべてあやまらずに反応すればこうした必要はないが、被験者によっては 2～3 の場面で誤認しており、従って反応語の評点不能である者も見受けられたので、これらを百分率に修正することにより選択した資料はいずれも一律の尺度で、採点されているようにしたのである。しかし、誤認が余りに多い被験者の資料、即ち誤り反応が 3 つ以上の場合はこの資料を棄却した。

このように各被験者ごとに百分率に修正された反応語について、今度は、各反応語ごとに平均と標準偏差とを求め、これを用いて標準得点 (Z-score) に改め、これより評点因子間の相互相関を算出し、これに Thurstone (1947) の所謂重心因子分析法を施し、さらに心理学的な意味付けのために軸転回を行なった。

因みに、相互相関関係の算出に当って採択した評点因子は、 $E', E, e, I', I, i, M', M, m, E, I$ の 11 であり、さらにこれに GCR を加えて 12 とした。

存在する因子の有意性の検定、即ち、抽出可能な因子数の決定は、Thomson (1951) の記載する Burt, McNemar, Tucker 等の判別規準に従った。

III. 結 果

以上の方法から求められた反応評点因子相互相関関係は第 1 表に示す如くである。

積極的な相関を示すものは、 E' と I' 、 E と E 、 e と i 、 I と I 、 M と GCR、GCR と E であって、逆の方向に積極的な相関を示すものは、 E' と e 、 i 及び m 、 E と I, i, M, m 及び I 、 e と I' 及び GCR、 I' と i 及び I 、 I と E 、 i と E 、 M と E 、 m と E 、 E と I などとなっており、一般的に云えば、**E**、**I** 及び **M** 系統の反応は、その内部では相互に積極的な正の相関を示すのに対して、**E** 系統の反応は **I** 及び **M** 系統の反応とは負の相関を示す傾向のあることを示唆している。勿論、障害優位型、自己防禦型及び要求固執型の反応間では、**E**、**I** 及び **M** 系統の反応相互間であっても、多少の非一貫性を示す。また男女間の相関の一致と齟齬を見てみると、一致しているものとしては、 E' と e 及び i 、 E と I' 、 I 及び i 、 e と I' 、 I 及び GCR、 I' と I 、 I と i, M, E 及び I 、 i と E 、 M' と M 及び GCR、 M と GCR 及び E 、 m と E 、GCR と E 、 E と I となっており、齟齬を示している

第1表 相互相関関係

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
		E'	E	e	I'	I	i	M'	M	m	<u>E</u>	<u>I</u>	GCR
1	E'		-188 -272	-354 -317	244 310	016 -059	-357 -319	-010 -200	-110 -291	-377 -241	019 111	-003 -055	082 -020
2	E	-188 -272		-019 199	-268 -166	-376 -524	-258 -274	-251 -046	-416 -286	-243 -446	338 563	-259 -162	-172 -042
3	e	-354 -317	-019 199		-207 -254	-119 -166	225 110	-110 023	-170 -236	-023 -201	-031 003	-055 -027	-253 -295
4	I'	244 310	-268 -166	-207 -254		-193 -247	-217 -398	-049 -179	016 -049	-060 -251	-027 -013	-150 -266	047 -016
5	I	016 -059	-376 -524	-119 -166	-193 -247		-104 -164	029 011	118 089	-042 -006	-298 -398	522 518	025 -025
6	i	-357 -319	-258 -274	225 110	-217 -398	-104 -164		-025 -119	069 058	087 283	-143 -223	024 081	-068 -067
7	M'	-010 -200	-251 -046	-110 023	-049 -179	029 011	-025 -119		-102 -082	020 -012	110 038	006 -007	073 114
8	M	-110 -291	-416 -286	-170 -236	016 -049	118 089	069 058	-102 -082		025 -013	-113 -192	115 040	406 338
9	m	-377 -241	-243 -446	-023 -201	-060 -251	-042 -006	087 283	020 -012	025 -013		-135 -128	016 -039	-018 006
10	<u>E</u>	019 111	338 563	-031 003	-027 -013	-298 -398	-143 -223	110 038	-113 -192	-135 -128		-227 -172	169 244
11	<u>I</u>	-003 -055	-259 -162	-055 -027	-150 -266	522 518	024 081	006 -007	115 040	016 -039	-227 -172		009 -010
12	GCR	082 -020	-172 -042	-253 -295	047 -016	025 -025	-068 -067	073 114	406 338	-018 006	169 244	009 -010	

・各細胞の上は男子，下は女子を示す。

・小数点略

・N_{男子=302}
女子=177

ものには、E' と E, M', M, m 及び E, E と e, M', M, m 及び E, e と i, M' 及び m, I' と i, M', m 及び I, i と m となっている。このことは、因子分析の手続きを経たのちにおいて、因子構造が男女の間でかなり類似する面もあるうが、反対に幾分かの相異をも示すだろうことをほのめかしている。

このような相互相関関係を因子分析して重心因子を求めてみると、第2表のようになる。先に述べた因子の有意性の検定の結果、男女両群とも、第IV因子までが有意であったが、第IV因子では、分散が非常に少なく因子の存在は充分に肯定し得るものではなかったので、第III因子までが意味のあるものとして第IV因子は棄却した。

この表から解るように、仔細な点では多少の相異は示されているけれども、第I因子では大体E系統の評点因子とそれ以外のものとに分れており、この点では男女両群ともほぼ一致していることが示されており、先に相関関係のところで触れた点が明白に暗示されていることがうかがわれる。第II因子以下については、このことは必ずしも云い得るわけではないが、重心因子として抽出される順序か

らいて、第Ⅰ因子が相当に重要であることからみて、この点は重視すべきであろう。即ち、次に示す心理学的意味付けのための軸転回への基礎となる重心因子の模様が、評点因子を分類するための大きな手がかりとなっている点に注目するとき、第Ⅰ因子がこのような形に正負に分かれたことは、従来 Rosenzweig (1938, 1944, 1960) が提唱しているように、外罰反応に対して内罰反応を対極におき、無罰反応を別の次元に置いているのとは違って、この重心因子の構造からみると、外罰反応に対して、内罰反応及び無罰反応が対極にくることをほのめかしている。

そこで、この重心因子に軸転回を施して得た心理学的意味を有する転回因子行列を示すと第3表のようになる。これによると、男子Ⅰ₂因子に対しては女子Ⅱ₁因子が、男子Ⅱ₁因子に対しては女子Ⅰ₂因子が、男子Ⅲ₁因子に対しては女子Ⅲ₁因子が夫々対応していると考えられる。かくして、第3表の転回行列を因子模様に変えてみると、第4表の心理学的因子模様となる。これによると、これまで一谷(1964)がP-F Studyについて因子分析を行なって、発達的に比較検討してきたものと類似した因子もみられるが、かな

第2表 重心因子行列(小数点略)

群 因子 評点	男 子 (N=302)			女 子 (N=177)		
	I	II	III	I	II	III
1 E'	467	-467	-247	-305	-540	-315
2 E	-545	-430	-373	-608	410	472
3 e	-447	324	-110	-169	431	111
4 I'	242	-283	180	-383	-530	-316
5 I	499	438	-352	534	-405	240
6 i	-238	454	245	359	398	-312
7 M'	114	-064	177	107	142	202
8 M	369	224	393	416	-216	147
9 m	-126	303	306	441	266	-445
10 E	-185	-457	126	-469	176	286
11 I	384	431	-266	407	-141	258
12 GCR	350	-125	400	188	-119	253

第3表 転回行列(心理学的因子行列)

	男子 (N=302)			女子 (N=177)		
	I ₂	II ₁	III ₁	I ₂	II ₁	III ₁
1 E'	083	-659	-235	-278	464	-437
2 E	-607	045	-502	-505	-711	-011
3 e	-091	540	-130	013	-475	-019
4 I'	-045	-372	175	-328	428	-486
5 I	720	-008	-215	058	481	521
6 i	077	497	265	603	-143	-019
7 M'	007	-124	182	025	-146	225
8 M	339	080	469	112	297	375
9 m	047	309	322	676	041	-072
10 E	-459	-216	037	-409	-401	-070
11 I	615	063	-148	077	196	456
12 GCR	094	-327	427	063	101	315

・小数点略

・各因子の添え文字は軸転回の回数を示す

・負荷量の絶対値が300以上のものを大文字で示す

第4表 心理学的因子模様

群 因子 極	男 子			女 子		
	I ₂	II ₁	III ₁	II ₁	I ₂	III ₁
(-) 極	E, E	E', I', (GCR)	E	E, E, e	E, E, (I')	I', E'
(+) 極	I, I (M)	e, i, (m)	M, GCR, (m)	I, E', I'	i, m	I, I, M, GCR

り相異した形の因子も抽出されているような傾向もうかがえる。この因子模様に基づいて考察を進めてみよう。

IV. 考 察

1. 重心因子行列について

住田・林・一谷(1964a)によると、Rosenzweig は欲求不満に対する反応語の種類としてこれを大別して3種の基本反応方向を想定している。即ち、

- ① 外罰反応 (Extrapunitive reaction; **E**)
- ② 内罰反応 (Intropunitive reaction; **I**)
- ③ 無罰反応 (Impunitive reaction; **M**)

である。これらは、個体が欲求不満場面に直面した場合に対処する自我水準における最も基本的な行動様式であると解することができる。

Rosenzweig では、個体または有機体が不利な環境に対処する防衛または適応行動の水準として、これを大別して生物学的水準(生理学的水準)、自我防衛水準(心理学的水準)及び社会的水準(集団力学的水準)に区別している。P-F Study では、これらのうち主として自我防衛水準の領域に関するものである。

個体の最も低い水準の、従ってある意味で最も基本的な生物学的水準での欲求不満における基本的反応様式は、個体をかかえる欲求不満事態に陥れた人または事物に対して、攻撃を加えるかあるいは逃避するかであるが、自我水準における反応では、この逃避反応が分化して、自罰(自責)と妥協とに分かれるのではないかと解される。

このような解釈を提案するのは、上のように11種の反応項目を因子分析すると、外罰系統の反応項目($E', E, \underline{E}, e$)を一方の極にとり、これを仮りに(+)とすれば、内罰系統($I', I, \underline{I}, i$)と無罰系統(M', M, m)の反応とは大体においてその反対の極(-)に集まって抽出される傾向があるからである。因子分析法は、多数の個体が示す多種多様の反応即ち有向量(Vectors)を全く客観的に分類する技法であって、複雑な現象の分析には好都合な分類道具である。

Rosenzweig の欲求不満反応の関係様式では、3種の反応を、憎しみからの罪悪感から生ずるものとして、これが外に向かう場合に外罰反応、内に向かう場合に内罰反応が生じ、別に愛情からの罪悪感から生ずるものとして、無罰反応を提案している。即ち、Rosenzweig の仮定様式では

$$\left\{ \begin{array}{c} E \text{ ————— } I \\ M \end{array} \right.$$

となって、EとIとは対立極傾向のものであり、Mはこれとは別個の次元の種類の反応となっている。しかるに、Rosenzweig (1944)では、この**E**系統の反応には、単純外罰性のものと、外罰的投射(extrapunitive projection)のそれとがあることを記載しているが、彼の様式に従うときは、この区別が判然としない弱点がある。そこでこれを因子分析した結果では、欲求不満事態への反応様式は、彼の様式とは異なって、

$$E \begin{array}{l} \nearrow I \\ \searrow M \end{array}$$

の如くなる。つまり、**E**系統の反応では、**I**系統に対する**E**と、**M**系統に対する**E**とがあることをほのめかしている。この様な点でも、因子分析法の適用は、彼の提案を一層具体的に、且つ積極的に示唆しているのではないと思われる。因子分析における因子軸は独立性のものである。換言すれば、上の図式は、**E**—**I**に関与する心理学的性質と、**E**—**M**に関与するそれとは質的に異なったもの

であることをほのめかしている。即ち、**E**系統中には、**I**系統及び**M**系統に夫々対応するような、異なった心理学的性質を含んでいることを暗示しているものと解したい。

このことを一層明らかにするために、重心因子行列に、さらに、軸転回を施したものが、先に呈示した第3表及び第4表の転回因子行列と心理学的因子模様である。

2. 転回因子行列（心理学的因子模様）について

i. 男子の I_2 因子と女子の II_1 因子について

男子群の第 I_2 因子 ($E, E \text{ --- } I, I, (M)$) と女子群の第 II_1 因子 ($E, E, e \text{ --- } I, E', I'$) とは対応関係にあると解せられる。

一谷 (1964) によれば、発達のには小3, 小5, 中I, 中IIIにおいては, $E, E \text{ --- } I, I$ が対極性を示していたのに対して, 高校2年になって, 男子では I, I の (+) 極に M が, 負荷量は小さいが付加され, 女子では, E, E の (-) 極に e が参与し, 対極の (+) 極は, I, I のうち I が消失し, これに代って E', I' が参与するという結果を示している。

ここで, この期の所謂思春期の心理的特徴として ego-ideal (自我理想) を追求する傾向が顕著になること, 及び, 男女間の性差的特徴として, 男子では, かような ego-ideal 実現に対して合理的 (rational) に対処する傾向が強いが, 逆に女子では, 非合理的 (irrational) であり, 且つ情緒的 (emotional) であることを挙げるができるであろう。

先ず, (-) 極をみると, 男子では, E, E が主となっているのに対して, 女子では E, E にさらに e が加わっており, 他方, 対極の (+) 極は, 男子では I, I に M が加わり, 女子では I のみとなって, それに E', I' が付加的に参与していることは先にも記述した通りである。この因子軸は (+)(-) の如何に拘わらず, 欲求不満に陥れられた場合に, 比較的客観的に判断を下し, それを外界に向けるか (E, E の方向即ち負の方向), または内界に向けるか (I, I などの方向即ち正の方向) である。つまり単純に相手に対して自己を主張したり (self-assertive), 攻撃したり (aggressive), 積極的に企図したり (enterprise) するか, またはその逆に自責的になって, 自分を攻めたり, 反省したりするかどちらかであって, 欲求不満に直面して, 客観的判断が個人間的 (interpersonal) に働くか, それとも個人内的 (intrapersonal) に働くかのいずれかであることをほのめかしている。しかるに, ここで, (-) 極において, 女子に e が参与した理由について, 単に他者に対して自己を主張するだけでなく, 個人間的に, 相手に対して欲求不満に対する後始末を依頼したり, 他に依存するという点で, E, E を一層強化しているものであり, 自己を主張するために, 相手にも後始末を強いたりすることをほのめかすものであって, 情緒性の顕著さや, 欲求不満の対処の仕方に非合理性 (irrational) がひそんでいることが示唆されているものと解したい。客観的判断を下す場面においても, 自己の欲求に固執してそれをおし通そうという情緒的な面が働きやすい可能性を暗示しているものではないだろうか。

(+) 極では, 男子において I, I に M が付加され, 女子では, I に E', I' が加わっている。男子では, 自責的に自己を攻めるに際して, 「かまわない」と相手を許容するような表現を用いることがうかがわれ, 妥協的な表現で自己の非を認め, あまり情緒性が前面に露呈されず, 比較的冷静であるが, 女子では「しまった」とか, 「ちゅっ」(E') とか云ったような失意, 失望的な表明や, 「何ともなかった」「かえって有益であった」というようなうらはらな表明によって自己の非を認めるといった形で, 欲求不満に対して自己の弱点を素直に表明せず, 何らかの形で欲求不満の障害を指摘, 強調したり, 全く否定したりするというように極端に趨る傾向があるのは E, E に e が参与する場合と同様に解することができるのではないか。つまり素直に単純に「すまなかった」「自分のミスであっ

た」ということがいえぬところに何らかの情緒性の参与していることを想定することができるだろう。

かくして、この因子軸は、本来は $E, \underline{E}$ — $I, \underline{I}$ の形で対極性を示すべきもので、欲求不満に対する客観的判断が個人間的にまたは個人内的に向かうだけのものであるべきものが、情緒性と合理性の各々が比較的顕著に働くか否かによって、上述の如く付加的な反応が参与することになるのである。

ii. 男子の II_1 因子と女子の I_2 因子とについて

この因子軸は、従来の (一) 極 — (十) 極が夫々 $E, \underline{E}$ i, m であったものが、男子では、 E', I' , (GCR) — $e, i, (m)$ となり、女子では、 $E, \underline{E}, (I')$ — i, m となったものと考えられる。この軸には、自我の独立 (ego-independency) を期そうとの動機が共通に支配しており、それが個人間的に働くか、個人内的に働くかによって $E, \underline{E}$ となるか i, m となるかの軸であって、これらが極端な異常型となったものが、夫々、妄想型 (paranoid type) 及び強迫型 (obsessive-compulsive type) である。しかるに、これが、高校生では上述のような結果となったことについて、つぎのような理由に基づいて解釈したい。即ち、先にも述べたように、この期の被験者の特徴として、一般的に、男女共に自我の理想 (ego-ideal) が強調されるが、性差的には女子では、比較的非合理的 (irrational) で、情緒的 (emotional) である。さらに、これに加えて、妄想型では、自我の独立 (ego-independency) を期すに当って、個体間的 (interpersonal) であって、このために、投射 (projection) の機制を合理的に (rational) に用いるのである。即ち、図式化すると、

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{general tendency} \\ \text{personality type} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{male} \cdots \cdots \text{rational} \cdots \cdots \text{㊶} \\ \text{female} \cdots \cdots \text{irrational, emotional} \cdots \cdots \text{㊷} \\ \text{paranoid} \left\{ \begin{array}{l} \text{rational} \cdots \cdots \text{㊸} \\ \text{interpersonal, ego-independency} \cdots \text{㊹} \end{array} \right. \end{array} \right.$$

の如くなる。これを用いて、男子の II_1 因子の (一) 極即ち E', I' , (GCR) と、女子の I_2 因子の (一) 極即ち $E, \underline{E}, (I')$ とについて考えると、先ず、男女共に ego-ideal が働く点は同様であるが、男子では、㊶+㊶の結果、㊸の傾向は一層強められるが、女子では㊸+㊷の結果、㊸の傾向は弱められる結果となる。さらに、男子では、ego-ideal の働きによって、直接的な外罰的投射 (extrapunitive projection) である $E, \underline{E}$ を避けて、それを抑制した形の「しまった」、「ちゅっ」、「残念」というような失意的表現 (E') にとどめられたり、うらはら反応 (I') となり、かくして、さらに一般的適応性としての GCR が補強的に参与する形となるが、女子では、逆に ego-ideal の働きは弱められることになり、外界的投射としての $E, \underline{E}$ をむき出しのまま表明する結果となるものと解したい。

他方、(十) 極についてはどうであろうか。本来は i が根幹となって、所謂帳消し (undoing) や潔白癖、完全主義 (perfectionism) の機制が中核となり、強迫型 (obsessive-compulsive) となるべきものであるが、男女ともにそれに、さらに、 m が補強的に参加し、時間的経過をまて事態を解決しようとすることによって完璧を期そう (perfection) とするが、男子の場合はそれに更に合理性 (rational) が働くがために、自己の完全さを全うするために、相手にも事態の解決をさせる (e) 結果となるものと解したい。そして、因子負荷の上からみると、むしろ、この傾向の方が一層顕著に働く傾向があると考えられる。

iii. 男子の III_1 因子と女子の III_1 因子とについて

この因子は、小3〜中Ⅲまでの研究では、一谷 (1964) は、一般的に E', e — M, m, GCR の対極を示すという結果を得ているが、ここでは、男子で (一) 極に E , (十) 極に $M, GCR, (m)$, 女子で

(一) 極に I', E', (十) 極に I, I, M, GCR という結果を得ていることは第4表に示すところである。即ち

	(一) 極		(十) 極
男子	E	——	M, GCR, (m)
女子	I', E'	——	I, I, M, GCR

となっている。(十) 極では男女を通じて M と GCR が共通に出現しているが、男子では (m) が、女子では I 及び I が、付加的に、または非常に大きな負荷量をもって参与していることがみられる。この極の典型的な人格型として、ヒステリー性的人格を設定したが、この研究においても、やはり、この極をそのように解することができる。その理由として、M 及び GCR が男女に共通に負荷を持っていることで、殊に M は、Rosenzweig のいうように、愛情喪失への恐怖と、愛情獲得への欲求が働き、そのために自己偽瞞を伴った抑圧 (repression with self-deception) の防衛機制を用いることに特徴があり、この異常型としてヒステリーを挙げているからである。そして、男子の (m) はこれを補強するものであるが、女子の I, I はなぜこれが出現したのか。上に述べたように、ヒステリーの特徴として、抑圧の機制を用いることを挙げたが、不都合なことは抑圧して忘却したかのように振舞うことには、その不合理性 (irrational) がうかがえる。これに加えて、先にも述べたような、この期の一般的傾向が働く。即ち、

{	general tendency	male	rational	㊶
		female	irrational, emotional	㊷
{	personality type	hysteroid	irrational, emotional	㊸
			interpersonal, ego-dependency	㊹

である。このうち

- { 男子では㊶+㊸の結果→㊸の傾向が弱まる
- { 女子では㊷+㊸の結果→㊸の傾向が強まる

ことが想定される。しかも、両群ともに、ego-ideal の働きが関与するが、男子では㊶の傾向が強いので、M, GCR にとどまり、M と同系統の (m) が補強することになるが、女子では、㊷の傾向が強いので、I, I 反応をとり入れることが可能になるものと解したい。

他方、III₁ 因子の (一) 極では、これまで小3～中Ⅲの段階では多少の変動はあったが E', e が中核となっていたものが男子では E のみが関与し、女子では E', I' が関与する結果となった。これは住田 (1961, 1962) によれば、心気症型 (hypochondriacal type) と考えられた。即ち、心気症型人格では、自我の独立乃至確立 (ego-independency) を能動的乃至積極的に否定 (denial) しようとすることが主たる動機と解せられる。ところで心気症とは、

- ㊶ 対人関係の煩わしさから逃避する (negation of interpersonal relationships) ために、これを自己の身体的状態に注意を向ける (intrapersonal relationships の重視) ことによってそらせようとすると共に、
- ㊷ 他方では自我の独立の要求の否定 (ego-dependency) からの不安に対する反動として、最も現実的で身近な身体的状態を気に病む

ことが Chrzanowski (1959) によって指摘されている。このように対人関係の逃避と、自我確立の能動的否定との両要因から、心気症においては、自己の存在消失の不安の反動として、最も身近で確実な身体状態を気に病む結果となる。かくして P-F 反応としては、

- ㊶ 明白な自我防衛反応 (E, I 及び M) を単純に回避した形をとり、単に「ちぇっ」「困った」

「残念」などというような失意、失望の表明である E' をとり、対人関係の煩わしさを単純に嫌っていることをほのめかしているし、また

- ㊤ “私にはできない” という自我の無力または自己否定 (self denial) を補う意味で、他者依存の表明や言及としての「助けてくれ」という反応である e となる

ことが住田 (1961, 1962) によって指摘された。

ところで、この (一) 極では、高校生の場合、何故男子では E となり、女子では E', I' となったのか、その理由については次のように解することができる。先ず男子では、先に述べたように、対人関係の煩わしさを単純に嫌っているがために本来は E' となるべきものが、合理性 (rational) が働くために、これが、他に対して煩わしいものに反撥する形となるために E となると考えられる。女子においては E' と共に I' が出現するのは、対人関係の煩わしさを単純に嫌っている (E') ものが非合理性 (irrational) が働いて、うらはら反応 (I') でも、平気でやれるところに、これが関与して、I' が同時に出現したものと考えられる。しかるに、男女共に e が消失したのは、ego-ideal が働き、そのために「自分にはできない」という自我の無力を補う意味での他者依存の表明 (e) を回避したことによるものと解したい。かくして、本来は E', e が出現して所謂心気症型を示唆するものが、上述のような形になったものと考えてよかろう。従って、この因子軸は従来と同様、ヒステリー型——心気症型の軸と解することができるのではなからうか。

このようにみてくると、Rosenzweig が欲求不満反応には一般に外罰反応 (E- 反応)、内罰反応 (I- 反応)、無罰反応 (M- 反応) の 3 型があるとして殊に E- 反応については、単純外罰反応と外罰的投射を区別したが、P-F 反応ではこれを具体的に分類して評点することができないが、因子分析にかけるときは、この点を判別することが可能となると共に、従来、彼が

$$\left\{ \begin{array}{l} E \text{ ————— } I \\ \quad \quad \quad M \end{array} \right.$$

の図式を提唱したのに対して、因子分析では E 系統の反応と I, M 系統の反応とが対極に集まる傾向があり、むしろ

$$\left\{ \begin{array}{l} E \text{ ————— } I \\ E \text{ ————— } M \end{array} \right.$$

の様式となって、E- 反応が分類されることが明らかとなり、彼の所論を一層積極的に支持することができる結果を得ることができたと解せられる。即ち、全般的な傾向として

$$\left\{ \begin{array}{l} E \text{ ————— } I \\ E \text{ ————— } i \\ E' \text{ ————— } M \end{array} \right.$$

となり、従来の Rosenzweig の見解がより判然としたと解したい。

iv. 発達及び性差に伴って新しく出現する因子について

高校 2 年生の男女夫々の集団について P-F 反応を因子分析した結果では、従来一谷 (1964) の研究した結果と比較対照しつつみても、上に考察したように特に新しい因子軸を抽出することはできなかったし、また、性差によって違った因子を見出すこともなかった。しかし、各因子に見られる、評点因子のあり方には、発達の、性差的に、多少の相異をみることができた。高校生について因子分析した今回の研究においても、発達の新しい因子は認められなかったし、性別に対応して異った因子を認めることもなかった。

そもそも P-F Study は、欲求不満事態における個体の反応から、その個体の自我防衛機制を想定

し、そこから、個体の人格に接近しようとする試みであることは明らかである。P-F Study における個体の反応は、大きく分類して外罰反応 (E', E, E, e), 内罰反応 (I', I, I, i) 及び無罰反応 (M', M, m) となるが、これら各種の反応が発達に伴ってある反応は漸次増加し、ある反応は漸次減少するという傾向は認められるが、このことは、個々の反応に対応する自我防衛機制が発達に伴ってある段階で出現したり、消失したりすることを意味するものではない。むしろこれは Rosenzweig (1950) のいう集団規準 (group norm) を示すだけであって、夫々の反応に対応する自我防衛機制は、発達の初期たとえば小学生などにおいてもすでに十分に認められるのである。勿論性別に伴う自我防衛機制の相異があるわけではない。個体によってどのような防衛機制をより多く用いるかには、いうまでもなく個体差が認められるのは当然であるが、少なくとも Rosenzweig P-F Study を通して接近する限りにおいては、個々の自我防衛機制は発達の初期から成人期を通じて一貫してみられるのであるから、これを因子分析した結果においてもやはり、因子が一貫してしかも安定してみられることはこのことを証拠付けているものとみてよいであろう。しかし、各因子に寄与する評点因子が、発達及び性差によって一貫するものと齟齬を生じるものとがみられるところに、夫々の発達段階及び性別に対応した特徴が見受けられるのである。

V. 結 論

高校2年生の男女両群を対象として、Rosenzweig P-F Study を Thurstone 法により因子分析した結果、3種の因子が抽出された。これらは夫々、従来一谷 (1964) が、それより発達段階の低い年令水準を対象として因子分析して得た因子と同様のものであったが、これら因子に参与する評点因子はある因子ではかなり相異なるものが見受けられたが、これは発達差及び性差に基づくものではあるが、抽出し得た因子そのものについては、小学校3年から小5、中Ⅰ、中Ⅲ及び高Ⅱを通じて、一貫していることがみられたのである。これは、評点因子の背景にある動機的水準や自我防衛機制について、発達の、性別的に差のないことを暗示しているものとみてよいだろう。

今後は、このような結果が、正常者群のみならず、異常者群、たとえば神経症者群についても、同様に敷衍し得るか否かを検討する余地が残されているとみてよいのではなかろうか。

Summary

The purpose of the present study was to clarify the factorial structure of reactions of senior high school students to the Rosenzweig P-F Study. The subjects were 302 male and 117 female students. The Thurstone's multiple factorial analysis was used as an analytical method. The data were analyzed separately in relation to sex. In each group three factors were extracted. These factors in each group were consistent with the factors extracted in the previous study by Ichitani, when the following concepts were taken into consideration :

- (i) Ego-independency and ego-dependency.
- (ii) Interpersonal relationships and intrapersonal relationships.
- (iii) Rationality of male students and irrationality of female students.
- (iv) General tendency to realize the ego-ideal at the age of puberty.

It was, therefore, concluded that the basic factorial structure of the Rosenzweig P-F Study was not so much changeable in relation to development and sex.

According to Rosenzweig's assumption, the extrapunitive and the intropunitive reactions were polarized by 'hate-guilt', and the inpunitive reaction was related to 'love-guilt'. The present

study, however, did not support such relationships. From the point of classification of the motives, the present study suggested that the extrapunitive reactions were in a opposite dimension in relation to the intropunitive and the impunitive reactions. This fact positively suggested that, as Rosenzweig described, the extrapunitive reactions had the double nature of the simple extrapunitive reaction and the extrapunitive projection.

参 考 文 献

- Chrzanowski, G. 1959 Neurasthenia and hypochondriasis. In Arieti, S. (Ed.) American handbook of psychiatry. Vol. I, Part II, Chapt. 13, New York, Basic Books, 258—271,
- 林 勝 造 1961 非行少年の Rosenzweig P-F Study における代表的な因子型と臨床像との関係 第8回矯正医学会第52分科会発表抄録
- 一 谷 彊 1964 人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究——Rosenzweig P-F Study とその人格理論を中心として——：正常児群の因子分析 京都学芸大学紀要 Ser. A, No. 25, 45—60.
- 一 谷 彊 1965a 人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究——Rosenzweig P-F Study とその人格理論を中心として——：P-F Study の因子構成別に編成した2実験グループのバレー・ボール競技における行動差について 京都学芸大学紀要 Ser. A, No. 26, 29—44.
- 一 谷 彊 1965b 人格の因子分析的・実験的並びに臨床的研究——Rosenzweig P-F Study とその人格理論を中心として——：P-F Study の因子分析から得た人格類型により構成した集団の競争場面に於ける行動特徴からみた因子特性の実験的検証 京都学芸大学紀要 Ser. A, No. 26, 45—62.
- Rosenzweig, S. 1938 The experimental measurement of types of reaction to frustration. In Murray, H. A. (Ed.) Explorations in personality. New York, Oxford Univ. Press, 5th Print., 1953, 585—599.
- Rosenzweig, S. 1944 An outline of frustration theory. In Hunt, J. McV. (Ed.) Personality and the behavior disorders Vol. I, New York, Ronald Press, 379—388.
- Rosenzweig, S. 1950 Norms and the individual in the psychologist's perspective. In Reymert, M. L. (Ed.) Feelings and emotions. New York, McGraw-Hill, 327—335.
- Rosenzweig, S. 1960 The Rosenzweig Picture-Frustration Study, Children's Form. In Rabin, A. I. and Mary, R. H. (Ed.) Projective techniques with children. New York, Grune and Stratton, 149—176.
- 住 田 勝 美 1961 P-Fスタディの因子分析的研究 心理テスト研究 第1号 1—6.
- 住 田 勝 美 (編) 1962 P-F Study 研究論文集 近畿精薄児教育研究会資料 (未発表)
- 住田勝美・林 勝造・一谷 彊 1964a ローゼンツェイク人格理論 京都 三京房
- 住田勝美・林 勝造・一谷 彊 1964b P-F スタディ使用手引改訂版 京都 三京房
- Thomson, G. H. 1951 The Factorial analysis of human ability. 5th ed., London, Univ. of London Press.
- Thurstone, L. L. 1947 Multiple-factor analysis; a development and expansion of the vectors of mind. Chicago, Univ. of Chicago Press.